

# 南条のシンボル 花ハス

## 第25回はすまつり

7月1日、花はす公園で第25回はすまつりが開幕し、関係者らがテープカットとくす玉割りを行い、お祝いしました。例年より少し遅れながらも順調に開花して、現在は、ちょうど見頃を迎えています。8月6日までの期間中は、「はすうどん」などを味わえるお食事処や藕紙作り体験等でお楽しみいただけます。

花はす公園は、南条特産の花ハスをさらに全国に知ってもらおうと町おこしの一環として整備されました。平成5年7月1日に花はす公園のオープンを記念して第1回はすまつりが開催され、世界の花ハス36品種で来園者を迎えました。現在は、約3.3haの敷地に約130品種の花ハスが栽培され、優雅に咲き誇る花ハスを観賞しようと県内外からの来園者は後を絶ちません。



### 家鼻杯

第1回はすまつりから行われている人気の体験コーナーです。大きな蓮の葉に穴を開け、ストロー状の茎を通して飲み物を飲みます。茎の繊維からハスのエキスも混ざり、夏バテ防止などの薬用効果があるとされ、子供から大人まで楽しめます。



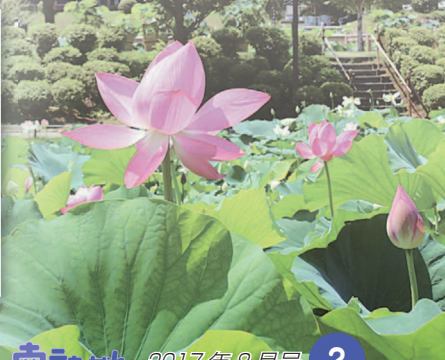
### 藕紙作り体験

ハスの茎の繊維で紙を漉く藕紙作り体験は、まつり期間中に毎日行われています。第1回はすまつりから欠かさず花はす公園でNPO法人はす工房花里音のお手伝いに来ている赤澤 和子さん(阿久和：写真左)と笛吹 静子さん(上野：写真右)のお二人。この日訪れた福井市の親子は、自然豊かな公園内での体験が良かったと満足そうでした。



### スタンドグラス作り体験

自宅のスタンドグラス工房で体験教室を開いている玉村 典子さん(日野)は、はすまつり期間中の週末に、公園休憩所でスタンドグラス作り体験やガラス細工の販売を行っています。今年は、水栽培ができる蓮の種をガラス細工と一緒に販売し、手軽なハス栽培の楽しみ方を紹介しています。



### 花はす茶屋 嶋崎 勇さん(鑄物師)



第1回はすまつりから、花はす茶屋でかき氷や「はすだんご」などの名物を販売している嶋崎さん。「以前は中小屋まで路上駐車ができたほど来場者があり、賑やかで出店をしても活気があり楽しかったです。これまで続けてこられたのも、町のため、人のため、との思いと何よりもここに花はす公園があるからです。」と微笑まれました。

### こう太郎のあいす屋さん 高橋 宏介さんと妹の亜由美さん(東谷)

第2回はすまつりから提供を始め今も変わらぬ味で人気の「はすソフトクリーム」を販売する高橋さん兄妹。移動できる仮店舗は、宏介さんオリジナルの手作りです。平成5年、ハス商品の開発依頼により父の(故)猛志さんがハスの葉を使用したソフトクリームを考案しました。平成17年頃には、販売期間と販路を増やそうとモナカの開発に成功し、当時1歳の孫の昂太郎くんの名前をとって「こう太郎のあいす屋さん」が誕生しました。「地元に住み、地元の魅力をPRできることに幸せを感じます。」と話される宏介さん。苦労も喜びに変えて頑張っています。



### お食事処(瓜生の館) 飯田 義巳さん(下牧谷)



平成15年から、はすまつり期間中に瓜生の館で「はすごはん」や「はすうどん」などの軽食を提供されている飯田さん。夜は、お隣の花はす温泉そまやま内でスナック幸月を経営されています。「お客様にまた来ていただけることを心がけています。」と昼も夜も接客に励まれています。



### はす茶 谷崎 多恵子さん(上野)

毎年6月、大きくなったハスの葉っぱを自宅で天日干しにして乾燥させてから、ハス茶を作り来園者に提供し続けています。暑い夏に、爽やかな飲み心地が喜ばれています。



### 越前竹工房 板村 修さん(越前市)

会社を定年退職後、奥様の生け花を生けるための花瓶を竹細工で作られたのがきっかけで竹細工工房を始められた板村さん。15年ほど前に中学生時代の恩師である増澤元町長のご縁で、町の役に立ちたいとの思いから、はすまつり期間中は毎日、竹工房を出店しています。ハスの花や今庄羽根首踊りなどの竹細工で、地元の歴史や文化を紹介しながら販売しています。



花はす公園 管理人 山内 隆寛さん(天王)

平成28年4月から花はす公園管理人の宮地克郎さん(下牧谷)と一緒に働き指導を受けた後、今年4月から管理人となられた山内さん。来園者とも気さくに会話し丁寧な対応で親しまれています。3月上旬から土壌改良用の肥料を蒔き始め、池の雪が解けてから5月上旬にかけて植え替え作業などを行います。今年は気温が低い日が続き初開花日は例年よりも1週間ほど遅れました。「花を咲かせてくれた時は、これまでの苦労が報われた気がしてホッと胸をなでおろしました。」と話される山内さん。花の可憐さと来園者の喜びの声を活力に諸先輩方の指導を受けながら日々試行錯誤して励んでいます。



# 人かがやき 花ささみだれる 安らぎの郷・南条

## ハス(蓮)

ハス(蓮)は古い歴史を持つ植物で、被子植物の誕生する白亜紀(約1億年前)に繁茂していたことが化石の出土で分かっています。



ハスの花であるレンゲ(蓮華)は水面から高い位置に花を咲かせ、中央には円すい形の花托があります。食用となる地下茎のレンコン(蓮根)のほか、茎や葉、実など全て薬用に用いられます。

また、泥の中から美しい花を咲かせる姿は、極楽浄土の花としても尊ばれてきました。2,000年以上の歳月を経て発芽した「大賀蓮」もあるように、ふしぎな生命力は、ハスの魅力の一つです。

## 花ハス生産日本一の歴史

厳しい転作政策の中で、米作に代わる農業生産の重要性を認識されていた堂宮区(故岩崎義雄さんが、県農産園芸課で特産担当であったこともあり、水田の水を抜かなくても栽培ができる切り花用のハスを、亡くなった戦友たちの慰霊の気持ちも込めて作り始めたそうです。南条地区が地質や気象条件に適しており、非常に品質のよい花ハスが収穫されたことから周辺の農家に呼びかけて生産を開始。特産物振興のリーダーとなり、花ハス生産の発展の基礎を築きました。昭和49年、自宅の10aの水田で試作から始めたハス栽培は、昭和51年には栽培面積15haに達し、生産農家15軒で全国生産の65%を数えるという日本一の出荷量を誇る時期もありました。品種は「誠蓮」で花弁は約120枚あります。7月の新盆用は関東方面に、8月の旧盆用は関西方面に出荷されています。

## 特産の花ハス栽培を支える 南条蓮生産組合長 井上典宣さん

「大型特殊自動車を運転するのが好きで18歳の頃からトラクターに乗っていました。」と話される井上典宣さん(堂宮)は、父の(故)井上静さんと一緒に25歳の時から花ハス栽培をはじめられました。

50歳で会社を辞めてから専業で農業を営み、平成25年からは南条蓮生産組合の組合長(2代目)を務めています。生産農家が7軒にまで減少するなか、担い手がなくなった田んぼを引き受け、8haの田んぼを管理しています。田んぼの深みは効率が悪く、田起こしだけでも250時間以上も費やすそうです。



井上典宣さん 35歳の頃 (上段左から3人目)

農家の高齢化が進む中、後継者である長男の哲宏さんも昨年から収穫機械を運転しています。哲宏さんは「父の後も絶やさず続けていきたいです。」と力強く話し、「若い組合員が増えて、コミュニケーションを形成できるのが理想です。」と微笑まれました。



収穫機械を運転する井上哲宏さん(写真左)

## 収穫から出荷まで

7月9日、井上典宣さんの田んぼと選花場には、親せきや知り合いなど27人が集まりました。収穫作業が、早朝3時から始まり、選別、包装など一つ一つ手作業で花が痛まないよう丁寧に箱詰めされました。農家7軒分の箱詰めされた花ハス約18,000本は、組合でまとめられて関東方面へ出荷されました。

